

## 第 18 回「若者との対話（二）」

\*\*\*

孔子と弟子との対話。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 18 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「若者との対話」第二回のお話です。

前回お話ししましたように、孔子は、その一生において多くの弟子を育てました。

しばせん しき  
司馬遷の『史記』という歴史書には、弟子達が三千人いたと書かれております。これはまあ、オーバーな話であります。三千人という数字はよく使う数字です。多数いたということです。

特に孔子晩年は全国から集まってきましたから、大きな塾であったようです。

孔子の弟子に対する教育方針ですが、個人個人への指導でしたので、今日のように教室で一斉に教えるというような方法とは違います。

教室で一斉に教えるとなりますと、まず一般的な話がありまして、そして知識を詰め込ませるようになっていきますが、孔子のところはそういう学校ではなかったようです。

学生達は孔子の周りにおりますので、孔子が朝起きて、夜寝るまで、しょっちゅう顔を合わせるわけです。ですから、歩いている孔子を呼び止めて、「先生、これはどういうことでしょう」などと、質問をしたりします。

教室で議論することもあったのですが、割合に弟子と孔子との対話が残っています。

もちろん、これは対話をそばで聞いていた人、あるいは弟子自身がノートしたのでしょう。

かなり残っています。

そういうものを見ていきますと、大体において、孔子は努力しろ、と言っています。

大半の人は、自力で何もかもができるなどということはありません。やはり誰かに教えてもらって、努力して、ということが普通です。

ただ、一人ですと、がんばってみようということになりますけれども、集団の中におりますと、優秀な人が目につく。あの男には敵わない、と。そうすると自分の努力がおなしくなる。当たり前のことです。

孔子の弟子達もそうでした。

中には、とびきり優秀な者もおりましたし、技量のある者も集まってきますから。

学生にばらつきが出てきまして、自信を失っていく者もあったようです。

孔子はことばを尽くして、そういう者を励ましました。その代表的なことばを挙げましょう。

「ぜんきゅういわ 冉求曰く、し みち よるこ 子の道を説ばざるにあらず。ちからた 力足らざるなり、と。

しいわ 子曰く、ちからた 力足らざる者は、もの 中道にしてはい 廢す。今、いま なんじ かぎ 女は画れり、と」(雍也第六)

冉求という弟子と孔子との対話です。このように、弟子が何ごとかを聞いて、孔子はこう答えた、というようなことばは、やはり他の弟子達にも非常に印象的であつたらしく、このような会話体の文が『論語』にはかなりあります。

冉求が言いました。「子の道を説ばざるにあらず」説ばざるの「説」という字、これは「悦」と意味は同じです。先生のお説きになること(子の道)を、不満で実行しないのではありません。

先生のおっしゃることは正しいと思っております。しかし、できない。身に付かないのです。

「力足らざるなり、と」私は力不足です、と言いました。

冉求は弱気になっているんですね。絶望していたのかもしれませんが。

しかし、師匠の孔子にそれを言うというところに救いがあります。黙って去っていく弟子も、おそらくいたと思います。

冉求は、率直に、自分は力不足で、教えを実行できない、と言いました。

孔子は答えました。「力足らざる者は、中道にして廢す」本当に力不足の者は中道、つまり途中で、やめてしまうだろうと、まずは一般論。

次が冉求への答えです。

「今、女は画れり、と」おまえは、はじめから限る。自分の力は足りない、自分で限定しているじゃないか、と。なぜ、そんなことをするんだ、と言っています。

まだまだ時間はある。努力していけばいいじゃないか、自分の力は、もう限界などと思わずにがんばれ、ということです。

実は再求は秀才でした。秀才にはよくこういうことがあります。頭がよく回るものですから、先先を読んでいきます。頭の回転が速いばかりに、自分はもうここまでかと、自分で自分の力の限界を決めてしまう。

むしろ、頭の悪い人の方が一所懸命がんばるんですね。世の常です。

秀才にありがちな、回転の速さゆえの、自己限界の先読み、それはやめろと言ったことばです。

次のことばです。

「子曰く、<sup>し</sup>い<sup>わ</sup>く、<sup>た</sup>と<sup>と</sup> 譬<sup>え</sup>ば、<sup>や</sup>ま<sup>つ</sup>く <sup>ご</sup>と 山<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>が<sup>ら</sup>如<sup>き</sup>に、<sup>い</sup>ま<sup>な</sup>ら<sup>ざ</sup>る<sup>こ</sup>と <sup>い</sup>っ<sup>き</sup> 一<sup>簣</sup>に<sup>し</sup>て<sup>し</sup>む<sup>は</sup>、<sup>わ</sup>が<sup>し</sup>む<sup>な</sup>り。

<sup>た</sup>と<sup>ち</sup> 譬<sup>え</sup>ば<sup>ち</sup>地<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>か<sup>に</sup>に<sup>す</sup>る<sup>が</sup>如<sup>き</sup>に、<sup>い</sup>っ<sup>き</sup> <sup>く</sup>つ<sup>が</sup> 一<sup>簣</sup>を<sup>く</sup>つ<sup>が</sup>覆<sup>え</sup>て<sup>し</sup>て<sup>し</sup>む<sup>と</sup> <sup>す</sup>す <sup>い</sup>え<sup>ど</sup> 雖<sup>も</sup>、<sup>わ</sup>が<sup>ゆ</sup>往<sup>く</sup>な<sup>り</sup>」(子罕第九)

これは弟子の誰かが質問したのだと思いますが、誰かはわかりません。

孔子は次のようにおっしゃった。「譬えば」比喻を出してきました。「山を為るが如きに」山を作るときに、この山はどうやら墓地の塚のようです。多くは土をもって作った古墳の様なものです。

「未だ成らざるごと」完成前に、「一簣にして止むは、吾が止むなり」「一簣」これは土を運ぶもっこ、一杯のもっこ。あと、もっこ一杯分で完成するのに、そこで止めてしまったら、それはやはり止めたということだ。完成には至らない。最後まで成し遂げなければならない。

今度は逆の場合です。「譬えば地を平らかにするが如きに」、窪みに土を入れて地面を平らかにする場合、たったもっこ一杯分の土を入れたなら、それはもう進んでいることになる。

山を作るとき、最後の一杯が足りなければ、完成にはならない。地面を平らにするに、最初の一杯がなければ、始まらない。ふたつの極端な例を出して、絶えず努力しなさいという話です。

たぶん、これも弟子が孔子に泣き言を言ったのでしょう。

答に、もっここというわかりやすい例を出しています。

抽象的なことではなく、具体的なもの、普段見聞きしているもので例を出すことで話がわかりやすくなっている。『論語』にはそういう文章がたくさんあります。

最後の文を読みましょう。

「<sup>しゆう</sup>子<sup>ぶ</sup>游<sup>じゆう</sup> <sup>さい</sup>武<sup>な</sup>城<sup>し</sup>の<sup>な</sup>宰<sup>い</sup>と<sup>わ</sup>為<sup>なん</sup>る<sup>じ</sup>。子<sup>え</sup>曰<sup>い</sup>く、<sup>なん</sup>女<sup>じ</sup>人<sup>ひ</sup>を<sup>と</sup>得<sup>え</sup>たる<sup>か</sup>か、と。曰<sup>い</sup>く、<sup>た</sup>澹<sup>だ</sup>台<sup>い</sup>滅<sup>め</sup>明<sup>めい</sup>と<sup>い</sup>う<sup>もの</sup>者<sup>あ</sup>有<sup>り</sup>り。

<sup>ゆ</sup>行く<sup>こ</sup>に<sup>み</sup>徑<sup>ち</sup>に<sup>よ</sup>由<sup>ら</sup>ず。公<sup>こう</sup>事<sup>じ</sup>に<sup>あ</sup>非<sup>ら</sup>ざ<sup>ら</sup>ば、未<sup>いま</sup>だ<sup>か</sup>嘗<sup>かつ</sup>て<sup>えん</sup>偃<sup>し</sup>の<sup>し</sup>室<sup>つ</sup>に<sup>いた</sup>至<sup>ら</sup>ず、と」(雍也第六)

子游とは若い弟子のひとりです。この人が「武城の宰」武城という土地の長官となりました。孔子の推薦を受けて行ったのでしょうか。このように、孔子の弟子は推薦を受け、地方都市の長官となったものがたくさんおります。



子游

出典：国立国会図書館

子游が赴任して、行政にあたることになりますが、孔子は若い弟子を心配して訊ねます。

「女（なんじ。汝）人を得たるか」お前は、お前が使える人間を得たか。有能な人材を見つけたか、と。

すると、子游が答えました。「澹台滅明という者有り」。この人も孔子の弟子です。子游は、孔子の学校での仲間の中から、自分の助けになる人を引っ張っていったのですね。もちろん孔子も知っている弟子です。

この澹台滅明は、次のようないいところがあると、言いました。

「行くに徑に由らず。公事に非ざれば、未だ嘗て偃の室に至らず」「徑」は早道、近道である

小道こと。澹台滅明は行くときには、小道を行かず、<sup>だいどう</sup>大道、決められた通常の道を歩いていく。ちょこちょここと近道したりしない。つまり行動は公明正大であるということです。

「公事」公式の仕事、「未だ嘗て至らず」は、決してこなかった。「偃の室」の「偃」は子游の名。

「室」はプライベートな部屋。公的な部屋「堂」<sup>どう</sup>の後ろに「室」があります。普通は「堂」で会います。仕事が終われば、子游はその「室」に下がります。澹台滅明は仕事が終わっても、子游の室には入らなかった。公の部屋でのみ話をした。つまり、プライベートなところに仕事を持ち込まないという、規律正しく堂々とした男と言いました。

この澹台滅明を抜擢した子游というのは、大変な人物です。

実は、孔子はこの澹台滅明について失敗していました。この人物は、いわゆる風采の上がらない男でした。孔子は自ら反省しています。自分は容貌で判断してしまったと。会ったとき、心の中で、大したことのない男と、思ったのでしょうか。

しかし、風采は上がらないが、仕事は素晴らしい。孔子はそのときの、間違っただ自分の判断を謝っています。

「後生 畏る可し」若い弟子たちの中に、こういった新しい流れを示す文章であります。

今回は「若者との対話」第二回をお話ししました。